

# 大麦管理情報 (第7号)

令和8年3月27日  
農業技術課広域普及指導センター

## 1 気象経過

- (1) 3月中旬：平年に比べ、平均気温は6.8℃（平年差-0.2℃）と並、降水量は28.0mm（平年比54%）と少なく、全天日射量は16.2MJ/m<sup>2</sup>/日（同133%）とかなり多かった。
- (2) 3月5半旬：平年に比べ、平均気温は8.2℃（平年差+0.4℃）と高く、降水量は9.5mm（平年比35%）と少なく、全天日射量は15.6MJ/m<sup>2</sup>/日（同121%）と多かった。

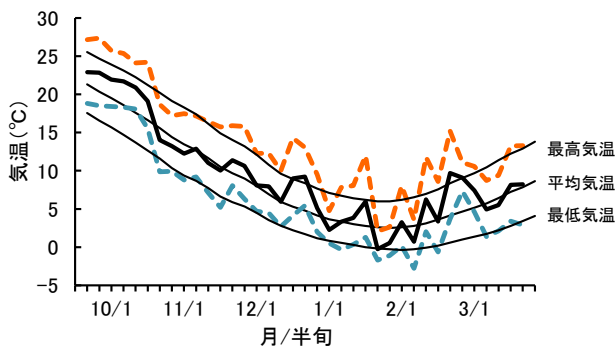


図1 気温の推移 (富山地方気象台)

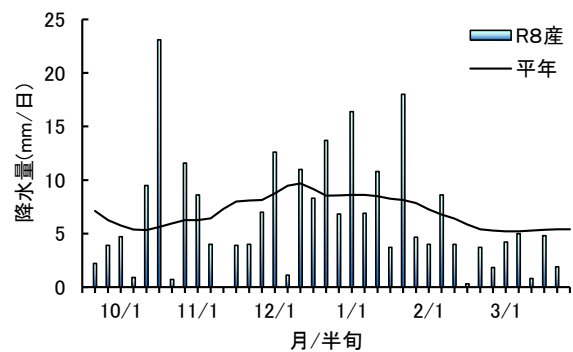


図2 降水量の推移 (富山地方気象台)

## 2 生育概況

- ・平年に比べ、草丈は短く（平年比81%）、茎数は並（同95%）、葉齢の展開は並（平年差+0.1葉）、葉色は淡く（同-2.4）なっている。また、幼穂長は1.3cm（同-0.6cm）と、平年に比べやや短くなっている。

表1 大麦の生育状況（3月27日）

年産	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂長 (cm)
		(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )			
R8年産	28.3	4.1	595	12.4	40.6	1.3
R7年産	25.4	4.2	715	12.3	44.3	0.8
平年	34.9	3.6	625	12.3	43.0	1.9

注1) 調査ほ場数：10、播種様式はすべてドリル播き

注2) R8年産の値は10月下旬播種を除いた平均、平年はH28～R7年産の平均、図3・4も同様

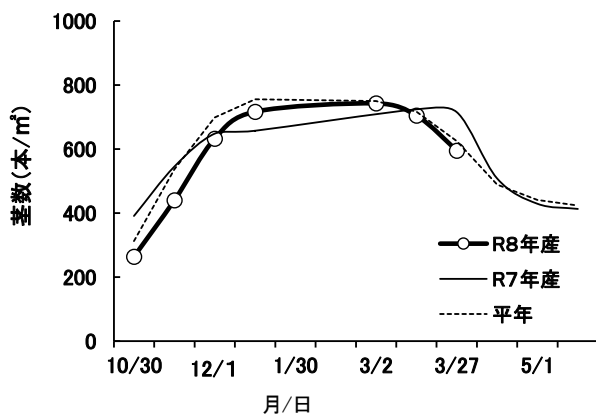


図3 茎数の推移

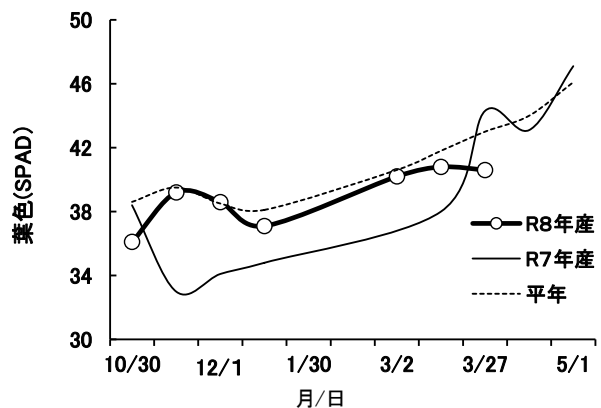


図4 葉色の推移

### 3 当面の技術対策

#### (1) 排水対策

- ・肥料の吸収効率を高めるとともに、出穂後の登熟条件を良好にするためには、根の健全化が重要であることから、再度、**排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底する。**
- ・用水や隣接田からの漏水を防ぐため、水口や畦畔を点検し、湿害を確実に回避する(図5)。



図5 隣接田から漏水しているほ場

#### (2) 止葉展開期追肥や防除作業等に向けた準備

- ・今後、気温が平年並で推移した場合、止葉展開期は平均で4月5日(平年:4月4日)、出穂期は平均で4月16日頃(平年:4月15日)と予想される(表2)。また、**今後は気温が高いと予報されており、生育が早くなると予想されることから**、生育状況を確認しながら、止葉展開期追肥や赤かび病の防除作業が適期に実施できるように準備する。

表2 幼穂長に基づく止葉展開期と出穂期の予測日(生育観測ほ)

年産 (播種時期)	3月27日時点の 幼穂長 (cm)	止葉展開期 (月/日)	出穂期 (月/日)	今後の気温が平年に比べ 高い場合(+1°C)の予測日	
				止葉展開期 (月/日)	出穂期 (月/日)
R8年産 (10月中旬まで)	1.3 (0.8~1.7)	4/5 (4/3~8)	4/16 (4/14~19)	4/4 (4/2~6)	4/15 (4/13~17)
	0.5 (10月下旬以降)	4/9~10	4/20~21	4/8	4/19
R7年産 (10月中旬まで)	0.8 (0.3~1.8)	4/10 (4/6~19)	4/20 (4/17~27)		
平年	1.9	4/4	4/15		

注1) R8年産は、今後の気温が平年並(H28~R7)に推移する場合の予測日(H18年農研の予測式を用いて、幼穂長から算出)

注2) ( )内は、幼穂長及び生育ステージの幅を示す。

注3) 平年はH28~R7年産の平均値

#### (3) 止葉展開期追肥

##### ア 肥効調節型基肥栽培

- ・肥料成分の溶出が登熟後半まで続くため、施肥量が基準より少ない等で極端に葉色が淡くなっている場合を除き、原則として**追肥は行わない。**

##### イ 分施肥栽培

- ・止葉展開期は、生育の早いほ場で3月末から4月初旬と予想される(表2)。
- ・追肥は、施用時期の遅れや過剰施肥により硝子率が高まるため、**出穂前11日頃を目安に遅れずに、生育量に応じて施用する(表3)。**

表3 分施肥体系における止葉展開期の生育と追肥量の目安

葉色 葉色板	予想穂数 (m <sup>2</sup> 当たり)	窒素追肥量 (10a当たり)
5未満	500本未満	2kg
	500本以上	1~2kg
5以上	500本未満	1kg
	500本以上	追肥しない

注) 葉色板の5はSPAD値で「45」

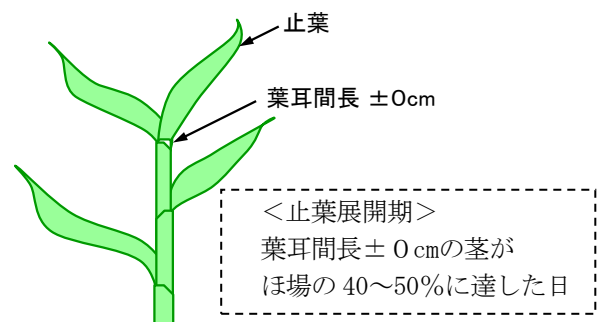


図6 止葉展開期の様子

#### (4) 赤かび防除の徹底

- ・ 地域や播種日による生育ステージの差が大きいことから、必ず出穂状況を見極め、最も効果的な防除時期の穂揃期（開花始め）とその7日後の2回防除を、晴れ間を利用して、確実に実施する。
- ・ 防除効果は液剤の方が高いため、特に1回目の防除は、可能な限り液剤を使用し、規定量の薬剤が確実に付着するように散布する。
- ・ 防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。
- ・ 無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。

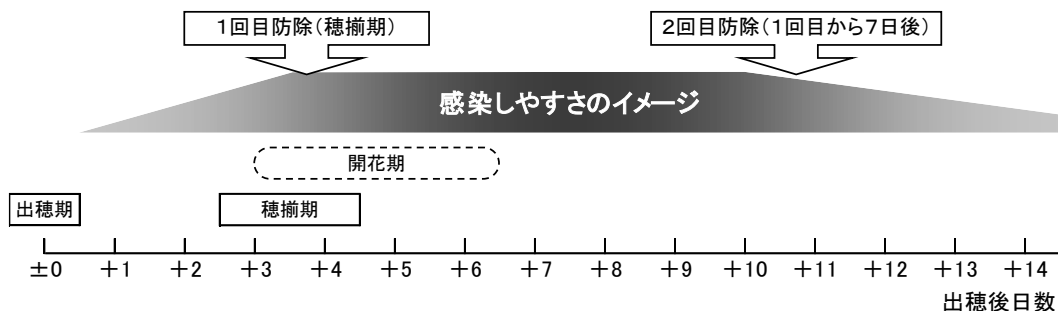


図7 赤かび病の感染しやすさのイメージ

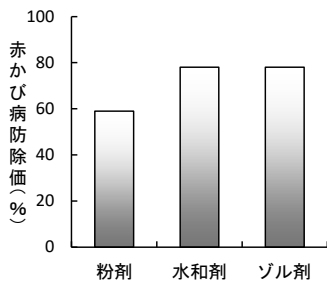


図8 トップジンMの剤型による防除効果の違い  
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

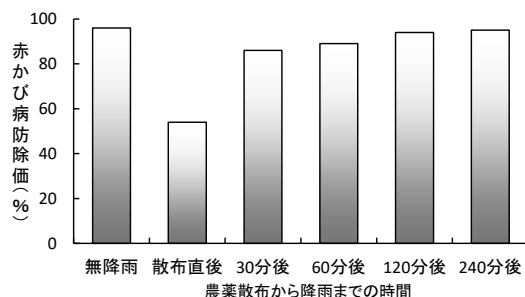


図9 農薬散布から降雨までの時間の影響  
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

注) 防除薬剤：トップジンM水和剤  
降雨は強い雨(25 mm/h)を2時間継続して実施

表4 赤かび病の防除薬剤

防除時期	剤型	薬剤名	希釈倍数(倍)	10a当たり散布量	使用時期(収穫前日数)	使用回数	RACコード※3
1回目： 穂揃期 (開花始め)	粉剤	トップジンM粉剤DL	—	4 kg	14日	3回以内※2	1
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3	3、DMI
2回目： 1回目から 7日後	液剤	トップジンM水和剤	1,000~1,500	150 L	30日	3回以内※2	1
		トップジンMゾル※1	1,500	150	14	3※2	
		シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2	3、DMI
		チルト乳剤25	1,000~2,000	150	21	1	
		ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3	
		ストロビーフロアブル	2,000~3,000	150	14	3	
ミラビスフロアブル	1,500~2,000	150	14	2	7、SDHI		
(無人航空機による散布)	(無人航空機による散布)	トップジンMゾル※1	8	0.8 L	21日	3回以内※2	1
		シルバキュアフロアブル	16	0.8	14	2	3、DMI
		チルト乳剤25	8	0.8	21	1	
		ワークアップフロアブル	10~16	0.8	7	3	
ミラビスフロアブル	8~16	0.8	14	2	7、SDHI		

※1 取扱メーカーによっては、適用がないので注意する。

※2 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む。

※3 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、1回目と2回目は異なる系統の薬剤を使用する。QoI剤は1作期1回までの使用とする。DMI剤は出穂後の赤かび病防除2回のうち1回までの使用とする。